

詩集等において著作者以外の者が編集著作権を取得するのは極めて例外的場合である。

判旨：本件編集著作物である「智恵子抄」は、詩人である高村光太郎が既に公表した自らの著作に係る詩を始めとして、同人著作の詩、短歌及び散文を収録したものであって、その生存中、その承諾の下に出版されたものであることは、原審の適法に確定した事実である。そうすると、仮に光太郎以外の者が「智恵子抄」の編集に関与した事実があるとしても、格別の事情の存しない限り、光太郎自らその編集に携わった事実が推認されるものであり、したがって、その編集著作権が、光太郎以外の編集に関与した者に帰属するのは、極めて限られた場合にしか想定されないといふべきである。

そもそも本件において、光太郎以外の者が「智恵子抄」の編集に携わった事実が存するかをみるのに、所論の点に関する原審の事実認定は、原判決挙示の証拠関係に照らして首肯するに足り、この認定したところによれば、(1) 収録候補とする詩等の案を光太郎に提示して、「智恵子抄」の編集を進言したのは、上告人澤田城子の被承継人であり、龍星閣の名称で出版業を営んでいた澤田伊四郎（以下、単に「澤田」という。）であったが、「智恵子抄」に収録されている詩等の選択は、同人の考えだけで行われたものではなく、光太郎も、澤田の進言に基づいて、自ら、妻の智恵子に関する全作品を取捨選択の対象として、収録する詩等の選択を綿密に検討した上、「智恵子抄」に収録する詩等を確定し、「智恵子抄」の題名を決定した、(2) 澤田が光太郎に提示した詩集の第一次案の配列と「智恵子抄」の配列とで一致しない部分がある、すなわち、詩の配列が、第一次案では、光太郎が前に出版した詩集「道程」の掲載順序によったり、雑誌に掲載された詩については、その雑誌の発行年月順に、同一の雑誌に掲載されたものはその掲載順に配列されていたのに対し、「智恵子抄」では、荒涼たる歸宅を除いては制作年代順の原則に従っている、(3) 澤田は、第一次案に対して更に二、三の詩等の追加収録を進言したことはあるものの、光太郎が第一次案に対して行った修正、増減について、同人の意向に全面的に従っていた、といふのである。

右の事実関係は、光太郎自ら「智恵子抄」の詩等の選択、配列を確定したものであり、同人がその編集をしたことを裏付けるものであって、澤田が光太郎の著作の一部を集めたとしても、それは、編集著作の観点からすると、企画案ないし構想の域にとどまるにすぎないといふべきである。原審が適法に確定したその余の事実関係をもってしても、澤田が「智恵子抄」を編集したものとすることはできず、「智恵子抄」を編集したのは光太郎であるといわざるを得ない。したがって、その編集著作権は光太郎に帰属したものであり、被上告人が、光太郎から順次相続により右編集著作権を取得したものとすべき。